

ニガウリの新産地の育成

J A茨城むつみ三和地区野菜生産部会のニガウリは、平成14年頃に数戸の農家が夏の作物として導入したのが始まりです。現在では、作付面積は概ね6 haで、ハウス栽培と露地栽培を組み合わせ、6月から10月まで出荷を行い、販売金額8千万円の県内最大の産地となっています。

当産地は、担い手が高齢化する産地が多い中、20代、30代の若手が多いことや、厳しい選果選別により高い市場評価を得ていることが特徴で、産地規模は年々拡大しています。

部会としては有利販売を目指し、収量・品質の向上によるブランド化の推進と部会内の女性同士の結びつきの強化を図っており、普及センターではJA、市町村と連携し、これらの取り組みを支援しています。

■ 収量・品質の向上 ■

出荷期間中は毎月1回、ほ場巡回及び出荷者会議を開催し、生産者同士で情報交換するなど研鑽を積んでいます。巡回は、栽培経験の浅い生産者や栽培のポイントとなるほ場数カ所を生産者全員で巡り、収量・品質の向上に取り組んでいます。



ほ場巡回で技術の研鑽を図る



レシピ作りで新たな挑戦

■ 三和ニガウリカレッジの開催 ■

平成22年度に、普及センターにおいて、部会のニガウリ生産者の配偶者等の女性を対象に、ニガウリ料理のレシピ作りを中心とした「三和ニガウリカレッジ（農村女性大学開設事業）」を開講し、参加者同士の結びつきが強まった結果、部会活動にも積極的に参加するようになりました。

■ ブランド化に向けた取り組み ■

普及センターでは、果色のばらつき防止のためカラーチャートを集荷場に設置することを提案するなど、品質の向上とブランド化に力を入れています。

販売促進活動では、古河市と連携を図り、ニガウリの愛称の公募、PR用ののぼりやはっぴの作成に助言・指導するなどの支援を行いました。愛称は「ほろにがうり」に決定し、併せて出荷箱等のデザインを刷新するなど、これまで以上に消費者に親しまれる産地を目指していきます。



愛称とキャラクターを印刷した出荷箱